

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01678

研究課題名（和文）いじめ目撃者の行動変容に焦点を当てた学校いじめ防止プログラムの開発と有効性の評価

研究課題名（英文）Development and Evaluation of School Bullying Prevention Programs Focusing on Behavioral Change of Bystanders

研究代表者

川畑 徹朗（Kawabata, Tetsuro）

神戸大学・人間発達環境学研究科・名誉教授

研究者番号：50134416

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 6,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、思春期前期を対象としたいじめ防止プログラムを開発し、その有効性を検証することである。プログラムの有効性に関する縦断研究を2022年から2024年にかけて実施した。

2023年2月から3月に実施した第1回目の事後調査の結果によれば、小学校の介入校においては比較校に比べて1年間のいじめ被害・加害経験ともに減少した。中学校においてはいじめ被害・加害経験の変化は認められなかったものの、介入校の生徒は比較校の生徒に比べて、いじめを目撃した時に被害者を助ける行動をとる自信が向上した。以上の結果より、開発したいじめ防止プログラムは、小学校版、中学校版ともに短期的に有効であることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

我が国のこれまでのいじめ対策は、早期発見・早期対応を主とする二次予防・三次予防であり、未然防止に焦点を当てた一次予防としてのいじめ防止プログラムは存在しなかった。いじめ被害者や加害者ではなく、目撃者の行動変容に焦点を当てた本プログラムは世界的にも少なく、その学術的意義は高い。

我が国ではコロナ禍によっていじめの認知件数は過去最高に達しており、有効性が示唆された本プログラムが広く学校現場で使用されることが望まれる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop a bullying prevention program for students in early adolescence and to verify its effectiveness. A longitudinal study on the effectiveness of the program was conducted from 2022 to 2024.

According to the results of the first post-test conducted in February and March 2023, the percentage of students who experienced being bullied or bullying others over a one-year period significantly decreased in intervention elementary schools compared to that in comparison schools. Although no changes were observed in junior high school students' experience of being bullied or bullying others, students in intervention schools had greater confidence in their behavior to help victims when they witnessed bullying than students in comparison schools did. These results show that the bullying prevention program has short-term effects in both the elementary schools and junior high schools.

研究分野：健康教育学

キーワード：いじめ防止 レジリエンシー 目撃者 介入研究 小・中学生

1. 研究開始当初の背景

いじめは、当事者である被害者や加害者だけではなく、目撃者のメンタルヘルスや行動にも極めて深刻な影響を及ぼす。また我が国におけるいじめ問題に関する先駆的研究者である森田洋司は、「いじめ集団の四層構造モデル」を提唱し、いじめには、加害者、被害者だけではなく、いじめをはやし立てて面白がって見ている「観衆」と、見て見ぬふりをしている「傍観者」がかかわっており、いじめ被害の多さは、学級内におけるいじめ加害者の人数や「観衆」の人数よりも、「傍観者」の人数と最も高い相関を示すことを明らかにしている。

以上のことから、いじめを目撃した子どもたちが、被害者を助ける行動を取れるように支援することは、いじめ防止の観点からも、多くの目撃者のメンタルヘルスの向上や他の危険行動の防止という観点からも極めて重要であると考えられる。しかし我が国においては、いじめ目撃時の行動に焦点を当てたいじめ防止プログラムは存在せず、その開発が求められている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、いじめが多発する小学校高学年から中学生期の児童生徒を対象として、いじめの被害者や加害者にならないようにすることに加えて、いじめを見た時に被害者を助ける行動を促進することを目指すプログラムを開発し、その有効性を検証することである。

3. 研究の方法

(1) いじめ防止プログラムの開発

我々が開発したいじめ防止プログラムは、小学生版・中学生版ともに、レジリエンシー形成に焦点を当てた「ユニット1」と、いじめ防止に特化した「ユニット2」から構成されている。

① レジリエンシー形成に焦点を当てたいじめ防止プログラム「ユニット1」

「ユニット1」を開発する上で基盤とした概念が、青少年の健全な発達にかかわる保護要因として近年注目されている「レジリエンシー（精神的回復力）」である。

レジリエンシーとは、貧困、争いごとの絶えない家庭や地域、いじめや暴力が頻発する学校など、成長にとって極めて困難と思われる状況にあっても、健全に育ち、有能な成人へと成長して行く青少年がもっている特性や能力である。

いじめ防止の領域では、西オーストラリア州エディス・コワン大学のドナ・クロス教授らは、レジリエンシーの要素を、1) セルフエスティーム、2) 対人関係スキル、ストレス対処スキル、意志決定スキルなどのライフスキル、3) ソーシャル・サポート感とし、これらの特性や能力を育てることを中心的内容とする小、中学生用のいじめ防止プログラム「Friendly Schools Plus」を開発・実践し、プログラム参加校の児童生徒は、対照校の児童生徒に比べて、いじめの被害を受けたり、いじめを目撃したりする割合が有意に低いことを明らかにしている。

本研究で開発した「ユニット1」は、研究代表者が主宰するJKYB ライフスキル教育研究会が開発したライフスキル教育プログラムを元に、いじめを含む様々な危険行動の防止やメンタルヘルスの向上を目的に再構成したものであり、以下の三つの要素から構成されている。

- A. 児童生徒間のトラブルが起りにくい、良い人間関係をつくる能力の形成
- B. 児童生徒間にトラブルが生じた際に、主体的かつ効果的にトラブルを解決する能力の形成
- C. トラブルがいじめなどに発展した際に、その悪影響を低減する能力の形成

表1に、小学校高学年版の内容を示した。

表1 JKYB いじめ防止プログラム「ユニット1」(小学校高学年版)

JKYB いじめ防止プログラム(ユニット1) (小学校高学年版)

▲ 児童生徒間のトラブルが起りにくい、良い人間関係をつくる能力の形成




1. 自分ができることに目を向けよう(5年第1時)(セルフエスティーム)
2. 個性的であること(5年第2時)(セルフエスティーム)
3. ずばらしい友だち(5年第3時)(セルフエスティーム、ソーシャル・サポート感)
4. 上手に話を聞こう(5年第4時)(対人関係スキル、ソーシャル・サポート感)
5. ボランティア活動-学校で(5年第11時)(セルフエスティーム、ソーシャル・サポート感)
6. 友だちをほめよう(6年第2時)(セルフエスティーム、ソーシャル・サポート感)
7. ボランティア活動-地域で(6年第11時)(セルフエスティーム、ソーシャル・サポート感)

■ 児童生徒間にトラブルが生じた際に、主体的かつ効果的にトラブルを解決する能力の形成

8. 止まって！考えて！決めよう！(5年第6時)(意志決定スキル)
9. 私の伝えたいこと(6年第3時)(対人関係スキル)
10. 争いごとになる前に(6年第4時)(対人関係スキル)

○ トラブルがいじめなどに発展した際に、その悪影響を低減する能力の形成

11. ストレスに強くなろう(1)(5年第9時)(ストレス対処スキル)
12. ストレスに強くなろう(2)(5年第10時)(ストレス対処スキル)

「A. トラブルが起こりにくい、良い人間関係をつくる能力の形成」は、セルフエスティーム研究の第一人者であるナサニエル・ブランデンの考え方に則り、自分の特性や能力などの個性に気付いて尊重するとともに、他者の個性も尊重できるようになることを目指している。また、上手な話の聴き方や他者を賞賛する方法を練習し、周囲の人のセルフエスティームに対して好ましい影響を与えることができることを実感させようとしている。さらに、学校や地域において実行可能なボランティア活動を計画・立案・実行する活動を通して、お互いの特性や能力を認め合うとともに、学校や地域に対して自分なりの貢献ができることを実感させることを目指す。

しかし、どのように親しい人間関係や組織であれ、争いごとや対立は起こりうる。子どもたちがそうした問題を主体的に解決するためには、「B. トラブルが生じた際に、主体的かつ効果的にトラブルを解決する能力の形成」は、必要不可欠な内容である。ここでは、トラブルを解決するために必要な意志決定スキルや自己主張的コミュニケーションスキルにかかわる学習活動が中心となる。

そして三つ目の要素として、仮に子どもたちがいじめにあった場合でも、耐えて生き抜き、さらに成長できるように、「C. トラブルがいじめなどに発展した際に、その悪影響を低減する能力の形成」を図ることも重要である。ここでは、ストレス対処スキルの形成にかかわる学習活動が中心となる。

② 目撃者の行動変容に焦点を当てたいじめ防止プログラム「ユニット2」

本プログラムを構成するもう一つのユニット（ユニット2）は、いじめ防止に特化したプログラムであり、特に目撃者の行動変容に焦点を当てている。

「いじめ集団の四層構造モデル」を提唱した森田は、日本、イギリス、オランダの小学校5年生～中学校3年生のいじめ目撃時の行動を比較した調査結果に基づいて、日本の子どもの特徴として、学年が進むにつれていじめを止める仲裁者の割合が減り、いじめを見てみぬふりをする傍観者の割合が増えることを挙げている。

こうした日本の子どもたちの状況を改善するためには、いじめは良くないという道徳的価値観を形成するだけでは不十分であり、そうした道徳的価値観を、実際にいじめを見た時に被害者を助けることができる道徳的実践力に結び付けることが重要であると考えられる。しかしながら、いじめを見た時に、自分の安全を守りながら、被害者を助けることは決して容易なことではない。こうした困難な状況では、とりうる行動を柔軟に挙げ、それぞれの結果を予測し、自分にとって被害者にとっても最善と思われる行動を選択し、実行する能力、すなわち意志決定スキルの形成が重要であると考えられる。

表2には、こうした意志決定スキルの形成を目指す小学校高学年版の「ユニット2」の概要を示した。

表2 JKYB いじめ防止プログラム「ユニット2」（小学校高学年版）

JKYB いじめ防止プログラム(ユニット2) (小学校高学年版)	
5年	授業目標 (内容)
1. いじめについて知ろう	・ いじめの身近な実態を知り、いじめが及ぼす様々な影響を挙げる (いじめに関する知識、いじめに対する態度、いじめ被害者に対する共感性)
2. もしも、いじめを受けたら	・ いじめを受けたときに、信頼できる周りの人に相談することは、有効な解決方法の一つであることを確認する (いじめに関する知識、自己効力感、ソーシャル・サポート感)
3. もしも、いじめを見たら	・ いじめを見過ごさず、被害者を助ける仲裁者になろうとする ・ 教室でのいじめや危険行動を避けるために、意志決定スキルを適用する (意志決定スキル、自己効力感、行動の意図)
6年	授業目標 (内容)
1. いじめに関する意志決定～もしもいじめに巻き込まれそうになったら～	・ 意志決定の基本ステップを確認する ・ いじめを目撃したときに、いじめ解決の行動につなげるために、意志決定スキルを適用する (意志決定スキル、自己効力感、行動の意図、いじめ被害者に対する共感性)
2. いじめ防止について考える (2時間扱い)	・ いじめ防止のために自分たちができることについて話し合う ・ 自校の「いじめ防止基本方針」を知り、いじめ防止のために協力してできることについて話し合う (いじめに対する態度、いじめ被害者に対する共感性、いじめについて相談しやすい学校内外のシステム)
3. いじめ防止キャンペーンの計画と作成 (2時間扱い)	・ いじめをなくすために必要なメッセージを作成し、周囲に発信する (主観的規範、周囲の人のいじめに対する態度、ソーシャル・サポート感)

5年の「1. いじめについて知ろう」においては、いじめの実態に関する質問に回答した後、身近な資料に基づいていじめの頻度や種類について確認する。続いて、いじめが引き起こす悪影響についてブレインストーミングを行い、いじめの影響は被害者だけにとどまらず、加害者や目撃者にも及ぶことに気付かせることをねらいとしている。

「2. もしも、いじめを受けたら」においては、もしいじめを受けた場合に解決する方法についてブレインストーミングを行う。次に、身近な資料に基づいて、いじめを受けた時には、周囲の人に相談する事も有効な解決方法の一つであることに気付かせることをねらいとしている。

「3. もしも、いじめを見たら」においては、教室で友だちがいじめられている場面を見て、友だちを助けるために意志決定の基本ステップを適用し、状況に応じた適切な意志決定ができるようになることをねらいとしている。

6年の「1. いじめに関する意志決定～もしもいじめに巻き込まれそうになったら～」においては、ネットいじめにつながる恐れのある状況において意志決定スキルを適用する。

最後に、「2. いじめ防止について考える」と「3. いじめ防止キャンペーンの計画と作成」(各2時間扱い)は、子どもたちがいじめの起こりにくい学校環境を主体的につくりだしていけるようになることをねらいとしている。こうした協働的活動を通してセルフエスティームの柱の一つである自己有能感が高まることが期待される。また互いの特性や能力に気づき、尊重することによって、セルフエスティームのもう一つの柱である自己尊重感の形成にもつながると考えられる。

「2. いじめ防止について考える」の第1時においては、いじめ防止のために自分たちでできることをプレスマットに記入する。第2時においては、自校の「いじめ防止基本方針」の未然防止にかかわる内容や他教科や他校の取組を理解し、前時に作成したプレスマットの内容をもとに、「誰に」、「どんなことを」、「どのように」メッセージを伝えるかを話し合ってみる。

「3. いじめ防止キャンペーンの計画と作成」においては、いじめ防止のメッセージを伝えるための活動を計画し、学級内で交流したり、学校内、家庭、地域に向けて発信したりする。

以上のプログラムの開発にあたっては、研究代表者が主宰するJKYB ライフスキル教育研究会 (<http://jkyblifeskills.com/>) に所属する学校教育関係者が研究協力者として参画した。

(2) プログラムの有効性の評価

本研究の目的の一つは、小学生及び中学生を対象に実施されたいじめ防止プログラムの有効性を評価することである。

評価には準実験デザインを用い、プログラム及び事前・事後調査を実施する介入群と事前・事後調査のみ実施する比較群を設けた。事前調査は2022年5～7月に、事後調査は2023年2～3月に実施し、事前調査では小5:241人(男123人,女113人,他5人;4校),中1:678人(男318人,女336人,他24人;5校)が回答した。調査内容は、最近1年間のいじめ被害・加害・いじめ目撃の経験,目撃時対処行動,同対処の自信,対人関係,意志決定,ストレス対処の各スキル,ソーシャル・サポート,家族のセルフエスティーム等とした。有効性の分析は、いじめ関連指標では、被害等の頻度や対処の質に順序尺度を用いているため、比較群,介入群の別に、事前事後の変化をMann-WhitneyのU検定により分析し群間で比較した。スキル等の指標では、各尺度の得点について事前・事後,介入の有無を二要因とする混合型分散分析を用いた。

4. 研究成果

プログラムの有効性を、いじめに関わる指標の事前・事後結果から判断すると(表3),小学生のみ有効性が確認できた。すなわち,1年間のいじめの被害,加害,規範意識(いずれも順序尺度)について,比較群では有意な変化は認められなかったが,介入群では有意に,かつ被害,加害が減少し規範意識が向上する方向に変化した。一方中学生では,比較群において「学校へ行くのが楽しい」が有意に低下したが,介入群では有意な変化は認められなかった。

表3 いじめに関わる指標のプログラム前後の変化:中央値(25%値,75%値)

	小学校					中学校				
	群(人)	効果	事前	事後	p	群(人)	効果	事前	事後	p
1年間のいじめ被害	比較群 87		1 (1, 1)	1 (1, 1)	0.970	比較群 308		1 (1, 1)	1 (1, 1)	0.194
	介入群 124	✓	1 (1, 2)	1 (1, 2)	0.022	介入群 248		1 (1, 1)	1 (1, 1)	0.760
1年間のいじめ加害	比較群 91		1 (1, 1)	1 (1, 1)	0.531	比較群 308		1 (1, 1)	1 (1, 1)	0.097
	介入群 124	✓	1 (1, 1)	1 (1, 1)	0.008	介入群 248		1 (1, 1)	1 (1, 1)	0.438
1年間のいじめ目撃時対処 <small>本計算のみ,事前・事後とも「見たことがない」を除く</small>	比較群 14		5 (3.75, 5)	5 (4, 5)	1.000	比較群 22		4 (3.75, 5)	4 (3, 5)	0.681
	介入群 32		5 (4, 5)	5 (4, 5)	0.212	介入群 32		5 (3.75, 5)	4 (3, 5)	0.063
学校へ行くのが楽しい	比較群 91		1 (2, 2)	1 (2, 2)	0.975	比較群 308	▽	1 (1, 2)	1 (2, 2)	0.016
	介入群 126		1 (2, 3)	1 (2, 3)	0.742	介入群 250		1 (2, 2)	1 (2, 2)	0.854
いじめはいけない	比較群 92		1 (1, 1.75)	1 (1, 1)	0.833	比較群 308		1 (1, 1)	1 (1, 1)	0.075
	介入群 126	✓	1 (1, 1)	1 (1, 2)	0.044	介入群 248		1 (1, 1)	1 (1, 1)	0.927

事前・事後の間で Mann-WhitneyのU検定を実施。✓肯定的変化,▽否定的変化

数値は中央値(25%値,75%値)。統計値は事前・事後の各該当数全体(事前・事後で異なる)の値。

次に、プログラムの有効性を、いじめ関連指標に関連し、かつプログラム内容に関わる目撃時対処の自信,意志決定等のスキルの変化から判断すると(表4),小学生ではほとんど認められなかったが,中学生では複数指標について有効性を確認できた。すなわち,中学生では,目撃時の対処の自信の3指標,ストレス対処スキルの2指標,ソーシャル・サポートの2指標において有意な交互作用が認められ,いずれも,比較群の低下や不変に対して,介入群で向上するなどした。ただし,有意な場合も効果量は大中小のうち「小」相当であった。

表4 目撃時対処の自信, スキル, ソーシャル・サポートのプログラム前後の変化: 平均 (SD)
(混合型二要因分散分析による)

		小学校				中学校				
		事前	事後	交互作用 p	効果量 η_p^2	事前	事後	交互作用 p	効果量 η_p^2	
目撃時対処の自信										
被害者対応	比較	8.13 (2.43)	8.77 (2.00)	0.228		8.74 (2.73)	8.91 (2.47)	0.101		
	介入	8.71 (2.72)	8.92 (2.71)			8.41 (2.76)	8.93 (2.42)			
中止要求	比較	4.91 (1.45)	5.35 (1.38)	0.049	0.019	5.08 (1.66)	4.91 (1.55)	0.004	0.015	
	介入	5.31 (1.86)	5.26 (1.66)			4.80 (1.65)	5.03 (1.46)			
知らせる	比較	9.92 (2.60)	10.10 (2.68)	0.539		10.60 (3.23)	10.43 (2.96)	0.030	0.009	
	介入	10.37 (3.05)	10.29 (3.19)			9.91 (3.17)	10.38 (3.05)			
合計	比較	23.00 (4.66)	24.27 (3.94)	0.088	0.015	24.43 (6.01)	24.27 (5.42)	0.004	0.016	
	介入	24.46 (5.76)	24.42 (5.89)			23.01 (6.26)	24.27 (5.75)			
意思決定スキル										
熟慮	比較	36.56 (7.92)	35.04 (6.20)	0.516		40.16 (7.76)	37.23 (6.94)	0.191		
	介入	37.53 (8.18)	35.41 (7.71)			38.16 (8.22)	36.02 (7.85)			
直感	比較	7.56 (2.23)	7.90 (2.27)	0.288		7.73 (2.57)	8.17 (2.29)	0.417		
	介入	7.73 (2.31)	8.46 (2.40)			8.11 (2.44)	8.37 (2.43)			
対人関係スキル										
向社会	比較	22.25 (3.14)	22.52 (2.98)	0.335		23.93 (3.13)	24.11 (3.22)	0.191		
	介入	23.12 (3.36)	22.99 (3.60)			23.16 (3.41)	23.67 (3.34)			
攻撃	比較	5.74 (1.53)	6.47 (1.83)	0.037	0.021	5.65 (1.72)	6.00 (1.84)	0.087		
	介入	6.08 (1.82)	6.29 (2.01)			5.93 (1.93)	6.04 (1.82)			
引込	比較	8.70 (1.78)	8.91 (1.75)	0.070	0.015	8.91 (1.89)	9.10 (1.93)	0.057		
	介入	9.21 (2.09)	8.98 (1.95)			9.12 (1.85)	8.98 (1.82)			
ストレス対処スキル										
サポート希求	比較	5.77 (1.51)	5.87 (1.53)	0.926		5.67 (1.81)	5.71 (1.79)	0.087		
	介入	5.55 (1.61)	5.67 (1.73)			5.30 (1.80)	5.62 (1.75)			
問題解決	比較	5.91 (1.47)	6.11 (1.29)	0.715		6.38 (1.43)	6.42 (1.46)	0.494		
	介入	5.82 (1.62)	5.94 (1.47)			6.14 (1.51)	6.26 (1.41)			
気分転換	比較	5.83 (1.72)	5.76 (1.78)	0.806		5.70 (1.92)	5.67 (1.80)	0.001	0.020	
	介入	6.13 (1.84)	6.01 (1.81)			5.53 (1.70)	6.02 (1.74)			
情動的回避	比較	4.21 (1.52)	4.70 (1.65)	0.360		4.78 (1.83)	5.07 (1.83)	0.018	0.010	
	介入	4.47 (1.78)	4.73 (1.84)			4.80 (1.73)	4.74 (1.70)			
行動的回避	比較	3.03 (1.19)	3.25 (1.06)	0.515		3.07 (1.15)	3.20 (1.21)	0.718		
	介入	3.20 (1.18)	3.30 (1.19)			3.03 (1.17)	3.20 (1.23)			
認知的回避	比較	4.90 (1.45)	4.94 (1.28)	0.490		4.70 (1.55)	4.87 (1.53)	0.290		
	介入	5.00 (1.54)	5.19 (1.63)			4.71 (1.52)	5.06 (1.53)			
ソーシャルサポート										
家族	比較	14.2 (2.51)	14.4 (2.54)	0.933		13.9 (2.93)	13.6 (3.03)	0.319		
	介入	13.2 (3.72)	13.5 (3.46)			13.7 (3.01)	13.7 (2.80)			
先生	比較	13.2 (2.23)	13.4 (2.64)	0.982		12.3 (3.20)	12.2 (3.12)	0.011	0.012	
	介入	12.4 (3.32)	12.5 (3.42)			11.6 (3.21)	12.1 (3.18)			
友達	比較	13.3 (2.11)	14.1 (2.17)	0.160		14.0 (2.50)	13.6 (2.65)	0.013	0.011	
	介入	12.8 (3.30)	12.9 (3.31)			13.2 (2.83)	13.5 (2.72)			

プログラムの有効性は、顕著とは言えないものの、小学生では、最終的目標であるいじめに関わる指標において、中学生では同指標に繋がる目撃時対処の自信やストレス対処スキル、ソーシャル・サポートにおいて認められた。小学生では、プログラムの影響の過程は不明確であるものの、介入群のみ有意な変化が見られたことから、何らかの肯定的影響が及ぼされたと判断できる。中学生では、プログラムのスキル等の具体的内容の有用性が示唆された。今後、いじめ関連指標とスキル等との関連性を分析し、有効性の高い学習内容の明確化やプログラム改訂の参考情報を提供する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西岡伸紀, 村上啓二, 池田真理子, 青山俊美, 村上元良, 堀江 優, 吉田 聡, 宋 昇勲, 川畑徹朗
2. 発表標題 小学校5年生及び中学1年生のいじめ目撃時の対処行動：実態及び心理社会的要因との関連性
3. 学会等名 一般社団法人日本学校保健学会第69回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宋 昇勲, 川畑徹朗, 西岡伸紀
2. 発表標題 情報リテラシーと青少年の危険行動との関連
3. 学会等名 一般社団法人日本学校保健学会第69回学術大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 JKYBライフスキル教育研究会（代表 川畑徹朗）編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 JKYBライフスキル教育研究会	5. 総ページ数 23
3. 書名 第7回 学校におけるいじめ防止対策研修会	

1. 著者名 JKYBライフスキル教育研究会（代表 川畑徹朗）編著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 JKYBライフスキル教育研究会	5. 総ページ数 157
3. 書名 レジリエンシー（しなやかに生きる心の能力）を育むJKYBいじめ防止プログラムー小学校高学年版ー	

1. 著者名 JKYBライフスキル教育研究会（代表 川畑徹朗）編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 JKYBライフスキル教育研究会	5. 総ページ数 106
3. 書名 レジリエンシー（しなやかに生きる心の能力）を育むJKYBいじめ防止プログラム－中学生版－	

1. 著者名 JKYBライフスキル教育研究会（代表 川畑徹朗）編著	4. 発行年 2023年
2. 出版社 JKYBライフスキル教育研究会	5. 総ページ数 30
3. 書名 第8回 学校におけるいじめ防止対策研修会	

1. 著者名 池田真理子、青山俊美（川畑徹朗監修）	4. 発行年 2023年
2. 出版社 東山書房	5. 総ページ数 182
3. 書名 ウェルビーイングをデザインする	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	村山 留美子 (Murayama Rumiko) (20280761)	神戸大学・人間発達環境学研究科・准教授 (14501)	
研究分担者	西岡 伸紀 (Nishioka Nobuki) (90198432)	京都女子大学・発達教育学部・教授 (34305)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	工藤 ひとし (Kudo Hitoshi)		
研究協力者	村上 元良 (Murakami Motoyoshi)		
研究協力者	池田 真理子 (Ikeda Mariko)		
研究協力者	山下 雅道 (Yamashita Masamichi)		
研究協力者	村上 啓二 (Murakami Keiji)		
研究協力者	吉田 聡 (Yoshida Satoshi)		
研究協力者	青山 俊美 (Aoyama Toshimi)		
研究協力者	牧野 淡紅恵 (Makino Tokie)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	堀江 優 (Horie You)		
研究協力者	堀 徹 (Hori Toru)		
研究協力者	宋 昇勲 (Song Seunghun)		
研究協力者	酒井 隆子 (Sakai Takako)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------